

○早稲田大学史学会・連続講演会

「わたしと歴史学、わたしと考古学」

(於文学部校舎)

第一回 平成一五年六月二五日(水)

調べることと書くこと

徳永健太郎(日本史)

私と中国史研究 小幡みちる(東洋史)

歴史学と社会学 中澤 達哉(西洋史)

考古学は面白い 寺崎秀一郎(考古学)

第二回 平成一五年六月三〇日(月)

「自分史」の試み

谷口 眞子(日本史)

韓国の歴史、日本の歴史

柳 美那(東洋史)

歴史研究から自分を探す

―西洋史研究の楽しみ―

山口みどり(西洋史)

私の考古学ことはじめ

小高 敬寛(考古学)

趣旨と経過

竹本友子

早稲田大学史学会は一昨年から専修進級ガイダンスの一環として連続講演会を開催してきたが、三回目となる本年度はシンポジウム「わたしと歴史学、わたしと考古学」と題して、六月二五日と三〇日の二日間に分けて行われた。本年度はとくに史学会を構成する日本史、東洋史、西洋史、考古学の四専修について、一年生がより具体的なイメージを持てるようにとの意図から、各専修二名ずつの若手の研究者が、それぞれの専攻する学問との関わりを自身の体験を中心にざっくばらんに語るという形式をとった。

一人一五分というきわめて短い持ち時間ではあったが、各講演者とも歴史学や考古学を学び始めたきっかけや出会い、海外での体験、研究上の苦労や喜びなど、さまざまな事柄についてわかりやすく語り、スライドの使用等の工夫も含めて、多忙な中でも十分に準備されたことが伝わってくる内

容であった。聴衆の中には一年生だけでなく、すでに専修に進級した学生も多数混じっており、先輩の熱のこもった話に耳を傾ける姿が印象的であった。講演後には会場から質問も出され、真剣な中にもときおり笑い声のあがるなごやかな雰囲気のうちを終了した。

後日一年生から寄せられたアンケート結果によれば、今回の試みはおおむね好評であり、講演内容に関して「おもしろかった」「専修進級を考える上で大いに参考になった」とする意見が多数を占めた。よりわかりやすく身近な内容で一年生に関心を高めてもらおうという企図はひとまず成功したと評価できるであろうが、講演会の日程や時間、会場等の調整や宣伝方法を工夫することで、より多くの学生の参加が期待できるのではないかと思われる。今回の経験をふまえて、来年度以降さらに充実した企画を考えたい。